

## 更なる高みを目指し プロ棋士として邁進

——大学での学びを囲碁の普及に生かす

●文学部 1年次生 三戸 秀平 さん

幼少期から囲碁の世界に親しみ、その魅力にはまって自身の棋力を常に磨き続けてきた三戸さん。大学生でありながらプロ棋士という肩書きを併せ持ち、日々鍛錬を重ねている。学業と稽古を両立しながら、仲間たちと囲碁界を盛り上げたいと普及活動にも力を注ぐ。

盤面に白黒の碁石が並べられていき、その陣地の広さが命運を分ける——シンプルであるがゆえに、無駄をそぎ落としたその美しさが際立つ囲碁の世界。「何も無いゼロの盤上に、無限の選択肢から道を定め、自ら陣地を開拓していく。そのプロセスが囲碁の魅力です」と話すのは現在プロ棋士四段である三戸秀平さん。



▲小学生時代の三戸さん

小学1年生の春、祖父が東京から九路盤を持ってきてくれたのが、囲碁に触れた始まりだった。コツをつかむのも早く、素質を感じた祖父の勧めで教室へ通うように。同世代の子供たちが集まる教室は楽しかったが、その才能が抜きん出ている三戸さんはすぐに高みを目指すようになった。

当時六冠だった井山裕太棋士のドキュメンタリー番組を見て、その強さにあこがれたのもプロへの道を進む後押しに。小学3年生の冬にスカウトされ、大会への出場経験も少ないまま採用試験をクリアし日本棋院の院生になった。院生になって5年後にはプロ試験にも合格、14歳でプロ棋士へ歩みを進めた。

順調にその才能を開花させてきたかに思えるが、伸び悩んだ停滞期も幾度となくあったそう。しかし先輩が開いた道場で、苦手だった詰碁に没頭したり、コロナ禍にはオンライン対局を重ねるなど、さまざまな形で向き合うことで都度その状況を打破してきた。「コロナ禍は頭の中を整理して、棋力を上達させる飛躍の充電期間となりました」。

一方で囲碁を通して触れた韓国や中国、台湾など東アジアの文化に興味を抱き、深く学びたいと「アジア・オープン・リサーチセンター (KU-ORCAS)」がある関西大学へ進学。キャンパスの立地は棋院にも通いやすく、学業と無理なく両立できている。興味があって履修した中国語の授業も楽しく学べており、今後は中国発祥といわれている囲碁の変遷などを学んで普及活動に生かしたいと意欲的だ。



三戸 秀平——みと しゅうへい

■2006年岡山県生まれ。岡山市立岡山後楽館高等学校卒業。文化会囲碁部所属。6歳から囲碁を始め、角慎介六段門下に。大阪ことも囲碁道場生を経て、現在は日本棋院関西総本部に所属している。2021年の棋士採用試験は1位で入段、2025年に四段へ昇格。同年、日本棋院生時代の仲間たちと「IGO INFINITY」を結成し、若い世代への囲碁普及を目標に活動中。



U40限定 指導会の様子

▼「IGO INFINITY」  
指導碁会イベントポスター



2025年秋、日本棋院関西総本部の若手棋士5人で囲碁の魅力を発信するためのグループ「IGO INFINITY」を結成。10月に行われたプレイベントの「U40限定指導会」は盛況で、11月から始めた40歳以下限定教室では指導碁や囲碁講座、交流対局などを行っている。「この機会に若い世代の未経験者や初心者の方たちにも楽しんでもらい、囲碁界をもっと盛り上げていきたいですね」。

最後に今後の自身の目標を聞いた。「23歳になるまでには結果を出したい。囲碁界の7タイトル、どれかは獲得したいと思っています」。力強いこの言葉に期待したい。



## よさこい踊りで 皆を笑顔に

——人生に「失敗」なんてない!?

●法学部 3年次生 加藤 春輝 さん

観客を巻き込む圧倒的な迫力と躍動感あふれる踊りが魅力のよさこい。全国でも人気の高いよさこいに子供の頃から熱中し、関西大学のよさこいチーム“漢舞”で踊りたい!と志望大学を決めたという加藤春輝さん。2026年に25周年を迎える“漢舞”の24代目代表として任期を終えたばかりの加藤さんに、熱い思いで駆け抜けた活動を振り返ってもらった。



加藤 春輝——かとう はるき

■2004年埼玉県生まれ。東洋大学京北高等学校卒業。小学生の頃からよさこいを始める。関西大学学生チーム“漢舞”では24代目代表を務め、全国のよさこい祭りに数多く出場。2024年に大阪で毎年開催される「こいや祭り」で準大賞、2025年には優秀賞を受賞。

現在100人近くのメンバーが所属する関西大学のよさこいチーム“漢舞”24代目代表の加藤さん。「観客の方々から『良かったよ!』『明日から仕事頑張れるわ!』と声を掛けてもらえると、僕たちの踊りが皆さんの活力になるのだと実感できてうれしいです」。

街を挙げてよさこいが盛んな埼玉県朝霞市出身。加藤さんも小学1年生の時から地元チームに所属して活動が続けてきた。大学進学を考えた時、YouTubeで“漢舞”の演舞を見て感動。「関東の大学に進学を考えていたのですが、『笑天下』という作品を見て、自分も絶対にここで踊りたい!と志望校を変えました」。

チームは2026年に創部25周年を迎える。全国の祭りを駆け回っているが、中でも大阪で開催される「こいや祭り」には毎年必ず参加。2024年は、数多くのチームから準大賞に選ばれた。「目標だった大賞に一步届かず、とても悔しかった。でも僕は曾祖父の“失敗なんてない”という言葉はずっと大事にしています。生きていれば失敗と思える経験もあるけど、最後に自分の人生が成功だったと思えるように歩めばそれでいいって」。

この悔しさをバネに、2025年はチームの代表として奮闘。ハードな練習に加え、自分たちで衣装や曲の原案を考え、振付も一から作り上げる。膨大な作業と練習量のためかメンバーが揃わないこともあったが、モチベーションを維持できるように声を掛けるなど、メンタル面でのフォローも積極的に行った。仲間と協力し合ったことも衝突したことも、今となってはすべて良い思い出になっている。

毎年約100チームが出場する「こいや祭り」では3年連続でフィナーレ進出8チームに選ばれ、大賞や準大賞は逃したものの優秀

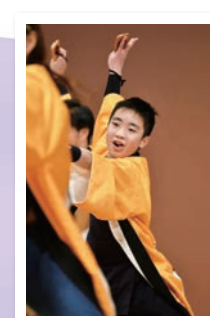
賞を受賞。「全力で取り組んだので胸を張れる結果です」と笑顔を見せる。こいや祭りをはじめとする全国の祭り以外にも、2025年の大阪・関西万博での期間限定イベント「大阪ウィーク〜夏〜」でギネス世界記録に挑戦する盆踊りにも参加。チームでの活動量が多いぶんつながりは強く、仲間はかけがえのない存在だ。

複数の班から成る“漢舞”での組織活動を通じて、いわゆる報連相の重要性や、同じ目標に向かって取り組む仲間の大切さも学んだ。そこで得たことは、就職活動や今後の人生でも役立てられることが多いと話す。卒業後は社会人チームに入り、よさこいに一生かかわり続けたいとのこと。

「これからも観てくれる人たちを笑顔にするよさこいを踊り続けていきたい。そして周りの人を幸せにできる人になりたいです」。



▲10歳の時に参加した「彩夏祭」(家族:父・母・弟と)



▲13歳の時「飯能よさこい」にて